

「1888年のニーチェ」

井ノ川 清

外国語教室
(1972年9月8日受理)

Nietzsche in the Year 1888

Kiyoshi INOKAWA

Department of Foreign Languages
(Received Sept. 8, 1972)

In 1889 Nietzsche's spirit sank into darkness. But the preceding year, that is, the year 1888 was fruitful for Nietzsche. Now what is the principle of Nietzsche's thoughts on the whole? It is "life". And the point of view of this "life" is concentratedly expressed in the works of the year 1888. In this essay an attempt is made to clarify peculiar characteristics of Nietzsche as "a philosopher of life" on the basis of the works in 1888, and to understand Nietzsche's final thoughts.

はじめに

1889年ニーチェの精神は闇に沈み、遂に再びこの闇の底から輝き出すことはなかった。だがその前年、即ちニーチェの最後の精神活動の年であった1888年はニーチェにとって実り豊かな多産な年であった。それは迫りくる精神的破局を予感して、蓄積されていた精神エネルギーが一挙に噴出したかのような感がするのである。つまりこの年にニーチェは、「ワグナーの場合」・「偶像のたそがれ」・「反キリスト者」・「ディオニュソス讃歌」・「ニーチェ対ワグナー」・「この人を見よ」を生み出した。

さて表面的には幾たびか変遷しつつ生成発展しつつけたニーチェの思想の原理的規準ともいべきものは一体何であったのだろうか。つまり価値判断の規準、対象に対する批判の規準、思考の根本的視点は一体何であったのだろうか？結論的にいえばそれは「生」であった。生が強まっていくのか、それとも弱体化していくのか、上昇するのか下降するのか、充溢なのか飢餓なのかということが規準なのであった。

「私たちが価値について論ずるときには、私たちは、生の靈感のもとで、生の光学のもとで論じているのである。すなわち、生自身が価値を指定するよう私たちを強

制するのであり、私たちが価値を指定するときには、生自身が私たちをつうじて価値づけているのである。」
(『偶像の黄昏』『反自然としての道徳』5番S. 968)

勿論この「生」の視点というのは初期の「悲劇の誕生」という作品においてすでにみられるものであり、その後次第に発展して「八十年代の遺稿」(「権力への意志」)に於て明確に定義されるものとなった。そしてこれは1888年の作品に於て集約的に現われるに至ったのである。ニーチェは近代人とキリスト教とを批判してやまなかったのであるが、その時の彼の批判の規準はやはり「生」であった。このことは「偶像のたそがれ」と「反キリスト者」の中で明確に表明されている。本論はいわゆる「生の哲学者」としてのニーチェの特徴的性格を崩壊期の作品、特に「偶像のたそがれ」と「反キリスト者」に則しつつ浮き彫りにして、ニーチェの終末の思想を原理的に把握しようとする試みである。

1. 近代性に対する批判の原点

「人類は、今日信ぜられているような仕方では、より善いもの、ないしはより強いもの、ないしはより高いものへの発展を示してはいない。「進歩」とはたんに一つの近代的理念、言いかえれば、一つの誤った理念にすぎな

い。今日のヨーロッパ人はその価値においてはルネサンスのヨーロッパ人よりもずっと下位にとどまっている。」「反キリスト者」4番S.1166)

ニーチェは彼の同時代人即ち「近代人」を痛烈に批判する。それはキリスト教化された生のデカダンとしての人間に対する批判である。だがこの近代人の下降する生は、たしかにキリスト教化されたことが主たる原因であるにしても、それより以前即ちソクラテスとプラトンにまでもさかのぼるのである。

「私はソクラテスとプラトンを、頹落の症候であると、ギリシア解体の道具であると、似而非ギリシア的であると、反ギリシア的であるとみとめたのである。」「『偶像の黄昏』「ソクラテスの問題」2番S.951)

では一体ソクラテスはなぜデカダンと見なされるのであろうか？

「私はソクラテスが何でもって魅惑したかを明らかにした。彼は医者、救世主であるかのようにみえたのである。『あらゆる犠牲をはらっても合理性を』』ということによせる彼の信仰のうちにあった誤謬を、さらに提示する必要があるであらうか？……ソクラテスは一つの誤解であった。……本能に抵抗する生は、それ自身一つの病氣、もう一つの病氣にすぎず——断じて『徳』への、『健康』への、幸福への帰路ではなかった。……本能と戦わざるをえないということ——これこそデカダンをあらわす定式である。すなわち生が上昇しているかぎり幸福は本能と等しい。」「『偶像の黄昏』「ソクラテスの問題」11番S.955, 956)

つまりニーチェは合理化というのは健全な本能の衰退によるのであるとし、ソクラテスを本能の衰退現象としての「理論的人間」であると規定する。ニーチェはこのように本能ということを極めて強調するのである。

「すべての優良なものは本能である。——したがって軽やかで、必然的で、自由である。……(私の言葉でいえば、軽やかな足が神性の第一の属性である。)」(『偶像の黄昏』「四つの大誤謬」2番S.972)

さらにニーチェはプラトンに対しても同じ視点からみた批判を下す。

「結局はプラトンに対する私の不信は深い。すなわち、私は彼を、古代ギリシア人の根本本能からきわめて逸脱したもの、きわめて道徳化されたもの、きわめて先在キリスト教的なものともとめるので——私はプラトンという全現象について『高等詐欺』という、ないしは、聞こえがよいと言うなら、理想主義という手厳しい言葉を——なんらかの他の言葉よりもむしろ使いたい。……プラトンは実在性に対する臆病者であり——したがって彼は理想のうちへと逃げこむ。」「『偶像の黄昏』「私が古

人に負うところのもの」2番S.1028f.)

プラトンは現実の世界を「偽の世界」であるとして、これに対するに「真の世界」としての「イデア界」をたてた。この二重世界論はキリスト教の「神の国」論へと引きつがれていくものである。キリスト教神学者についてニーチェは言う。

「神学者の影響がおよんでいるかぎり、価値判断は逆倒しており、『真』と『偽』という概念は必然的に逆転している。すなわち、生に最も有害なもの、それがここでは『真』と呼ばれ、生を上げ、高め、肯定し、是認し、勝ちほこらしめるもの、それが『偽』と呼ばれる。」「(『反キリスト者』9番S.1170)

ニーチェはこのことを批判している。

「世界を『真の』世界と『仮象の』世界とに分けることは、デカダンスの一暗示にすぎない、——下降する生の一症候にすぎない。」「(『偶像の黄昏』「哲学における『理性』」6番S.961)

「『仮象の』世界が唯一の世界である。『真の世界』は虚言し加えられたものにすぎない。」「(『偶像の黄昏』「哲学における『理性』」2番S.958)

生に対して敵対的であったのは単にソクラテスやプラトンやキリスト教神学者にとどまるものではない。これまで賢者と言われてきたすべての人がそうであったのだとニーチェは語る。このことはニーチェがヨーロッパ二千年の歴史に否を言い、これを断罪していることを意味する。

「生についてはいつの時代にも最高の賢者たちは同じ判断をくだしてきた、それは何の役にも立たないと……いついかなるところでも、ひとは彼らの口から同じ響きを聞いてきた、疑惑に満ち、憂愁に満ち、生の疲労に満ち、生への反抗に満ちた響きをを。……『いずれにしてもここでは何か病んでいるにちがいない』——私たちはこう答える。あらゆる時代のこれら最高の賢者たち、人は彼らをまず近くから熟視すべきであろう！彼らはおそらくはことごとく両足でもはやしかりと立ってはいなかったのではなからうか？老いぼれよぼよぼ？デカダン？」(『偶像の黄昏』「ソクラテスの問題」1番S.951)

即ちニーチェは一言にして断言する。

「偉大な賢者たちは衰退の典型である。」「(『偶像の黄昏』「ソクラテスの問題」2番S.951)

これと同じことは哲学者に対する批判にも表わされている。

「哲学者たちが数千年扱ってきたすべてのものは、概念のミイラであった。現実的なものは何ひとつとして彼らの手からは生命あるものとしてでてこなかった。」「(『偶像の黄昏』「哲学における『理性』」1番S.957)

2. キリスト教批判

ニーチェの生涯はキリスト教との格闘の生涯であったといえる。ではニーチェがあれほどまでに執ようにキリスト教を攻撃したのはなぜなのだろうか。

「教会はあらゆる意味での切除をもって激情と戦う。その施術、その『治療』は去勢である。教会は、『いかにして欲望を精神化し、美化し、神化するか?』とはけっして問わない——教会はいつの時代でも戒律の力点を根絶(官能性の、矜持の、支配欲の、所有欲の、復讐欲の)根絶に置いてきた。——しかし激情の根を攻撃することは、生の根を攻撃することにほかならない。すなわち、教会の実践は生に敵対的である。」(『偶像の黄昏』「反自然としての道徳」1番S.965)

ニーチェは自然性ということ強調するのだがキリスト教でいう道徳はまさしく反自然なのである。

「私は一つの原理を定式であらわす。道徳におけるあらゆる自然主義、言いかえればあらゆる健康な道徳は、生の本能によって支配されている。……反自然的道徳、言いかえれば、これまで教えられ、崇まわれ、説かれてきたほとんどあらゆる道徳は、逆にまさしく生の本能にそむいている。」(『偶像の黄昏』「反自然としての道徳」4番S.967f.)

キリスト教は人間を「改善する」と主張するが、ニーチェに言わせれば、それは「病氣」にするということの意味する。

「動物園においておこることを知っている人なら、野獣がそこで『改善』されるということには疑いをもつ。野獣は弱化されるのである、危険の少ないものにされるのである、抑圧的な恐怖の念によって、苦痛によって、傷手によって、飢餓によって、病的な野獣となるのである。——事情は僧侶が『改善』したところの馴養された人間に関しても変わらない。……生理学的に言えば、野獣との戦いにおいては、病気にさせることが野獣を弱化させる唯一の手段でありうる。このことを教会は理解した。教会は人間を頽廃せしめ、弱化せしめながら、——それでいて人間を『改善』したと要求したのである。……」(『偶像の黄昏』「人類の『改善者たち』」2番S.979f.)

「キリスト教は、猛獣を支配しようとねがうが、その手段は、それを病弱ならしめることである。——弱化せしめるというのが、馴致のための、『文明化』のためのキリスト教的処方である。」(『反キリスト者』22番S.1182)

キリスト教が病者の宗教であるという彼の主張をさらにみてみよう。

「人は、キリスト教に『回心する』のではない、——そのためには十分病弱でなければならぬのである……私たち他の者、健康への、そして軽蔑への気力をもっている私たち、なんと私たちは、肉体を誤解することを教えた宗教を軽蔑してよいことか/……十分の栄養をとらないことが『手柄』になっている宗教を/健康のうち一種の敵、悪魔、誘惑をみとめて戦う宗教を/……キリスト教は、病めるものの怨恨を、健康な者に手向う、健康に手向かう本能を根拠としている。……一つのより高貴な志操はキリスト教で徹底的に没落した、——キリスト教こそこれまで人類の最大の不幸であった。」(『反キリスト者』51番S.1216 ff.)

一言にしていえばキリスト教はデカダンに基く宗教なのである。

「教会の欲するとき宗教的人間は、典型的デカダンである。」(『反キリスト者』51番S.1216)

では一体デカダンとは何か。ニーチェの定義はこうである。

「私は、動物が、類が、個体が、その本能を失うとき、おのれに害あるものを選択し、それをかえって好むとき、そのものは頽廃したと名づける。……生自身を私は、諸力の生長に対する、持続に対する、蓄積に対する本能、権力に対する本能とみなす。すなわち、権力への意志を欠くところには、衰退がある。」(『反キリスト者』6番S.1167 f.)

ニーチェはキリスト教文化一般を批判して次のように言う。

「私の主張はこうである、現今人類がその至高の願望をそのうちに一括しているすべての価値はデカダニスの価値である。……衰退の価値が、ニヒリズム的価値が、最も神聖な名称をかたって支配権をふるっている。」(『反キリスト者』6番S.1167 f.)

ここでニーチェのキリスト教的神概念に対する批判をみてみよう。これを検討することによってニーチェの否定する神と肯定する神とが明瞭になるであろう。

「キリスト教的神概念は——病める者の神としての神、蜘蛛としての神、精神としての神は——地上で達せられたもののうち最も腐敗した神概念の一つである。……神が生を光明化や永遠の肯定となる代わりに生の矛盾へと変質したとは/」(『反キリスト者』18番S.1178)

ここでも「生」がキリスト教的神概念批判の規準となっている。

「上昇する生」の前提が、すべての強さ、勇敢さ、尊大さ、誇らしさが神の概念から消去されるなら、神の概念が一歩一歩と、疲労した者のささえの杖の、すべての溺れる者のたのみの綱の象徴にまで沈下してゆくなら、す

ぐれて貧しい者の神、罪ある者の神、病める者の神となり、かくして「救い主」、「救世主」という賓辭が神の賓辭一般としていわば残存するなら、そうした変化は何を物語るのか？ 神的なもののこのような低落は？」（「反キリスト者」17番 S. 1177）

神を「生」を規準にして考えるということは結局は「権力への意志」を規準にして考えることを意味する。

「以前には神は、民族を、民族の強さを、民族の魂からのすべての攻撃的で権力を渴望するものをあらわしていたが、いまや神はただただ善き神にすぎない……まことに、神々にとっては次の二者選一以外にはない、すなわち、神々は権力への意志であるか、——そのかぎりでは神々は民族の神となる……あるいは権力への無力であるか——そのときに神々は必然的に善となる……」（「反キリスト者」16番 S. 1176）

「善」とはニーチェによるば「権力への意志」が衰退したものをいう。

「なんらかの形式で権力への意志が衰退するところには、そのつど生理学的退化、デカダンスもまたある。デカダンスの神性が、最も男性的な徳や衝動を切除されて、いまや必然的に、生理学的に退行した者の、弱者の神となる。彼らはおのれ自身を弱者とは呼ばない。彼らは『善人』と自称する。……歴史のいかなる瞬間にはじめて善き神と悪しき神との二元論的虚構が可能となるかは、わかることである。屈服者がおのれの神を「善自体」に引き上げると同じその本能で、彼らはおのれの征服者の神から優れた特性を抹殺する。……どうして、今日なおもキリスト教神学者どもの愚直さに追従して、神の概念が、『イスラエルの神』から、民族神から、キリスト教の神へと、すべての善の総括へと発展しつづけてきたのは進歩であるなどと、彼らとともに宣言することができようか？」（「反キリスト者」17番 S. 1177）

ニーチェは神を「善」そのものであるというようにみなすことに反対して次のように極言する。

「自然に反して神を去勢してたんに善のみの神とすることなど、ここではまったく望ましくもないことであろう。悪しき神は善き神と同様必要である。……激怒、復讐、嫉妬、嘲笑、奸策、暴行を知らない神に、なんのかわかりがらうか？」（「反キリスト者」16番 S. 1176）

即ちニーチェは神の概念から「自然性」が剥奪されたことを憤っているのである。この「反自然性」ということはキリスト教の特徴をなすものであるが、それはすでにユダヤ人の地盤から引きついだものなのである。

「私はここでキリスト教の発生にのみ触れよう。……ユダヤ人は世界史の最も注意すべき民族である。……彼らは、これまで民族が生きることができ、生きること

の許されていたすべての諸条件に反抗してそれと一線を画した、彼らはみづから自然的諸条件への対立概念を創造した、——彼らは、つきつぎと、宗教を、礼拝を、道徳を、歴史を、心理学を、救いがたい仕方、これらの自然価値と矛盾するものへとねじまげてしまった。」

（「反キリスト者」24番 S. 1183 f.）

「イスラエルの歴史は、自然の価値からすべてその自然性を剥奪する典型的な歴史として貴重である。……古い神は以前なしえたことの一つをももはやなしえなかつた。神は棄てられるべきはずであつた。ところが何がおこつたのか？ 神の概念が一変せしめられ、——神の概念から自然性が剥奪された。」（「反キリスト者」25番 S. 1185）

このような神概念に基く道徳は必然的にデカダンスの道徳にならざるをえない。

「道徳は、もはや民族の生と生長の諸条件の表現でも、もはや民族の最も奥底の生の本能でもなく、抽象的となり、生の対立物となってしまう。」（「反キリスト者」25番 S. 1186）

この道徳は心理学的にみるならルサンチマンに基く道徳なのであるとニーチェは言う。

「私は、私の『道徳の系譜』においてはじめて、高貴な道徳とルサンチマン道徳という対立概念を心理学的に提示しておいたが、後者は前者への否定から発現したものである。しかしこれこそ徹頭徹尾ユダヤ的・キリスト教的道徳なのである。生の上昇運動を、出来のよさを、権力を、美を、自己肯定をこの地上で表示するすべてのものへと否と断言しうるためには、ルサンチマンの天才となった本能が一つの別の世界をここで捏造しなければならず、この世界からみてあの生の肯定が悪と、非難すべきもの自体とみなされた。」（「反キリスト者」24番 S. 1184）

「反キリスト者」の最終ページでニーチェはキリスト教を総括して次のように断罪を宣言する。

「健康、美、出来のよさ、勇敢さ、精神、魂の優秀さに反抗する、生自身に反抗する謀叛の標識としての十字架……キリスト教に対するこの永遠の告訴を私は、所かまわずいたるところに掲げようと思ひ、……私はキリスト教を、一箇の大いなる呪咀、一箇の大いなる最も内的な頽廢、……一箇の大いなる復讐本能と呼ぶ、——私はそれを一箇の不滅な人類の汚点と呼ぶ。」（「反キリスト者」62番 S. 1235）

3. イエス・キリストについて

「わたしの言うことがおわかりだったろうか？——十字架にかけられた者 対 デイ・オ・ニユ・ス」 「この人を

見よ」の文字通り最後を飾るこの余りにも有名な文句は問題性をはらんだ象徴的な語句である。これを字義通り解釈すると、ニーチェは自己をキリストに対立する人物とみなしていたというように解釈されうる。たしかにそうも言えることは一面的に妥当するが、しかしニーチェはイエス・キリストその人に対して非難めいたことはほとんど語っていないのである。彼はイエス・キリストその人とキリスト教とを明確に区別して語っており、キリスト教に対しては仮借ない批判をあげせるが、キリストに対しては極めて好意的な見方をしているのである。そしてこのことは決して軽々しく見過されてよいといったものではなく、基本的に認識しておくべき重要点なのである。以下にイエス・キリストその人に対するニーチェの見解をみていこう。

「私は問題に対する私の解答をさきに出しておいた。この解答の前提となっているのは、救世主の類型がひどく歪曲されてしか保存されていないということである。」(「反キリスト者」31番 S. 1192)

キリスト教はイエス・キリストを歪曲してしまったというのがニーチェの根本的考えである。ではニーチェはイエス・キリストそのものをどのように把握するのか。「私がこの偉大な象徴主義者について何もの理解するとすれば、それは、彼が内的実在性のみを実在性と、『真理』とみなしたということ、……『天国』は心の状態である、——『地上のかなたに』ないしは『死後に』やってくる或るものではない。……『神の国』は、なんら待望されるようなものではない。それは、昨日をもたず、明後日をもたず、『千年』待ったとて来ることはない、——それは心での経験である。」(「反キリスト者」34番 S. 1196 f.)

即ちイエスは心における「内なる真理」について語ったのである。

「やや寛大に表現すれば、イエスを一箇の『自由精神』と名づけるかもしれない——イエスはすべての固定したものをなんら認めない。……イエスだけが知っている『生』という概念、経験は、彼にあっては、あらゆる種類の言葉、定式、法則、信仰、教義とあいられない。彼は最も内なるものについてのみ語る。『生命』ないしは『真理』ないしは『光』とは、この最も内なるものをあらわす彼の言葉である……(——彼の証明は内的な『光』、内的な快感や自己肯定、純然たる『力の証明』である——)。」(「反キリスト者」32番 S. 1194f.)

さらにイエスの生涯は福音的実践者としての生涯であったのであり、この「実践」という点をニーチェは強調する。

「この『悦ばしき音信の報知者』は、彼が生きたごと

く、彼が教えたごとく、死んだのである——『人間を救う』ためにではなく、いかに生くべきかを示すために。実践こそ、彼が人類に残したものである。」(「反キリスト者」35番 S. 1197)

「神への道は『懺悔』でもなく、『罪の赦しのための祈禱』でもない。福音的実践のみが神へとみちびくのであり、この実践こそ『神』である。……おのれが『天国にいる』と感ずるためには、おのれが『永遠』であると感じるためには、どのように生きなければならないかということに対する深い本能、他方、これ以外のいずれの態度をとっても断じておのれが『天国にいる』と感ずることはないのだが、このことのみが『救世主』の心理学的実在性である。——一つの新しい行状であって、一つの新しい信仰ではない……」(「反キリスト者」33番 S. 1195f.)

さらにまたイエスは神と人間との間を分つ距離関係を除去した。

「彼は神と人間とのあいだのあらゆる裂け目を否認していた、彼は神と人間との一体化をおのれの『悦ばしき音信』として生きぬいた。」(「反キリスト者」41番 S. 1203)

ニーチェはこのようにイエスを評価した上で歴史的キリスト教はこのイエスの教えと正反対の教えを作り上げてしまったという。

「すでに『キリスト教』という言葉が一つの誤解である——、根本においてはただ一人のキリスト者がいただけであって、その人は十字架で死んだのである。『福音』は十字架で死んだのである。」(「反キリスト者」39番 S. 1200)

そしてニーチェはイエス・キリストその人の実践と教えに則した宗教は今後においても復活する可能性があるとして明確に主張するのである。

「たんにキリスト教的実践のみが、十字架で死んだその人が生きぬいたと同じ生のみが、キリスト教的なのである。……今日なおそうした生は可能であり、或る種の人たちにとっては必然的ですらある。真正のキリスト教、根源的キリスト教は、いかなる時代にも可能であるだろう。」(「反キリスト者」39番 S. 1200)

4. ニーチェの芸術観

ショーペンハウアーが、世界の本体を「生への盲目的意志」として、世界は本質的に「苦」であり、この苦からの救いは、芸術、特に悲劇や音楽によって可能であると述べたのを受けついで、ニーチェもまた芸術に生の救済を求めたということは初期の作品「悲劇の誕生」にみられるとおりでである。では終末期のニーチェは芸術

を一体どのように考えていたのであろうか。この点を少しばかり考察してみよう。

「芸術家の最も下の本能は芸術をめざしているであろうか、それともむしろ、芸術の意味を、生をめざしているのではなからうか？生の願望を？——芸術は生への大いなる刺戟剤である。」(『偶像の黄昏』「或る反時代的人間の遊撃」24番 S. 1004)

ニーチェはここで明かなように芸術をも生の視点のものとみようとしている。

「美学はまことに一つの応用生理学以外の何ものでもないのである。」(『ニーチェ対ワグナー』「私が異論をとえるところ」S. 1041)

このことを極論してニーチェはいう。

「すべての美は生殖を刺戟する。」(『偶像の黄昏』「或る反時代的人間の遊撃」22番 S. 1003)

要するにニーチェは芸術を生理学的条件のものと考察しようとするのである。

「芸術があるためには、なんらかの美的な行為を参照があるためには、一つの生理学的先行条件が不可欠である。すなわち、陶酔がそれである。陶酔がまず全機械の興奮を高めておかなければならない。それ以前には芸術とはならないからである。……陶酔にある本質的なものは力の上昇や充満の感情である。」(『偶像の黄昏』「或る反時代的人間の遊撃」8番 S. 995)

ニーチェは芸術の根底に生をみるのであるが、しかもこの生の上昇と充満が問題なのである。即ち力が問題なのである。

「人間の権力の感情、その権力への意志、その気力、その矜持——これは醜いものとともに下降し、美しいものとともに上昇する。」(『偶像の黄昏』「或る反時代的人間の遊撃」20番 S. 1002)

芸術においても結局は権力のへ意志が問題になってくるということはニーチェの「偉大なる様式」についての次の言に明白に表わされている。

「建築家は、ディオニュソスの状態をも、アポロンの状態をもあらわしてはいない。芸術をもとめているのは、ここでは、大きな意志の行動、山をも移す意志、大きな意志の陶酔であるからである。最も力強い人間がつねに建築家に靈感をあたえてきた。建築家はたえず権力の暗示のもとにあった。建築物においては、……権力への意志が可視的となっているべきである。建築術は、……形をえた一種の権力の雄弁である。権力と安全の最高の感情が、偉大なる様式をもっているものうちには表現されている。」(『偶像の黄昏』「或る反時代的人間の遊撃」11番 S. 997)

さらにニーチェは極めて人間中心的な芸術観を展開す

る。

「何ひとつとして美しいものはない、人間のみが美しいのである。すなわち、この素朴さにすべての美学がもとづいており、この素朴さが美学の第一の真理である。」(『偶像の黄昏』「或る反時代的人間の遊撃」20番 S. 1001)

「人間は世界自身が美で満ちみちていると信じており、——その原因であるおのれ自身を忘れている、人間だけが世界に美を贈ったのである。」(『偶像の黄昏』「或る反時代的人間の遊撃」19番 S. 1001)

即ち「美自体」というものではなく、それは人間の外在化形態、つまり「生」の放射された投影物なのである。「人はこうした状態においてはすべてのものをおのれ自身の充満から豊かにする。すなわち、何を見ようと、それは張り満ち、緊密に、強く、力のこもったものにみえる。この状態の人間は事物を一変させ、ついには事物が彼の威力を反映するにいたる、——ついには事物が彼の完全性の反射となるにいたる。このように完全なものへと一変せざるをえないということが——芸術にほかならない。……芸術においては人間は完全性としておのれを享受するのである。」(『偶像の黄昏』「或る反時代的人間の遊撃」9番 S. 995)

5. ディオニュソス的

ニーチェの思索の出発点は「近代人」批判からはじまる。ニーチェはキリスト教化された近代人は生の衰退現象以外の何ものでもないと断じ、その発生の始源をソクラテスとプラトンにまでさかのぼってたずね、そこに合理化という、自然的本能に反する行為を探知する。ソクラテス以後次第に下降した生はキリスト教によって徹底的に衰退せしめられてしまう。ニーチェはかくしてキリスト教をも生の光学のもとで論じ、これをラディカルに批判する。だがニーチェは歴史的キリスト教とイエス・キリストその人とを明確に区別し、イエスは「内なる真理」について語ったのであり、彼の生涯は福音的实践者としての生涯であったのであるとしてイエスを高く評価し、このイエスその人の教えと実践にもとづいた根源的で真正なキリスト教の復活の可能性をも指摘するに至る。さらにショーペンハウアーが世界の苦悩の救済を芸術に求めたのを受けついでニーチェもまた芸術を評価し、生の高揚の促進剤と考える。ニーチェが結局において最後に求めるのは生のデカダンとしての近代人に対する存在である。この存在とは何か？即ち新しい人間とはどのような存在であるのか？これに対する解答をも生の哲学者としてのニーチェは当然生の光学のもとで論ずる。

「人類に代わって次にあらわれるべき生物が何であるかということが、私がこの書物で提出する問題ではない（——人間は一つの終極である——）。そうではなくて、いかなる人間典型が、価値のより高い、生きるにより値し、未来のより確実なものとして、育成されるべきであるか、意欲されるべきであるかということである。」

〔反キリスト者〕3番S.1166)

このようにニーチェは新しい人間の育成を問題にするのであるが、それはまず、キリスト教道徳を信じている、生のデカダンとしての病的な近代人に対立する存在を求めることから出発する。

「私が最も深くたずさわってきたもの、事実それはデカダンスの問題であった。……衰退の特徴について眼識をそなえてしまえば、道徳の心得もまたそなわる、——道徳のこのうへなく神聖な名称や価値定式のしたに何が隠されているのかがわかるのである。すなわち、それは、貧困化した生、終末への意志、大きな疲労にほかならない。道徳は生を否定する……そうした課題のために私には自己訓練が必要であったのである、すなわち、ヴァーグナーをもふくめて、ショーペンハウアーをもふくめて、全近代的「人間性」をふくめて、身についた一切の病的なものに敵対することが。」(『ヴァーグナーの場合』「序言」S.903)

この病的な存在から解放される新しい人間は何を規準にして測られるべきであるのか？

「あらゆる個人は、はたしておのれが生の上昇線をあらわしているか下降線をあらわしているかを吟味される必要がある。」(『偶像の黄昏』「或る反時的人間の遊撃」33番S.1008)

即ち生が上昇しているか下降しているか問題なのである。さらにニーチェはキリスト教的な理想的人間に対して現実的人間をたてる。

「人間を是認するものは、その実在にほかならない、——この実在が人間を永遠に是認するであろう。なんらかのたんに願望された、夢想された、真赤な嘘でかためられた、捏造された人間に比べれば、現実的人間はどれほど多くの価値をもつことであろうか？」(『偶像の黄昏』「或る反時代人間の遊撃」32番S.1008)

ニーチェはまた新しい人間はあふれるばかりの生エネルギーを保持していなければならないとする。

「偉大な人物は偉大な時代と同じく、そのうちに巨大な力が蓄積されている爆発物である。……天才は——作品における天才も、行為における天才も——必然的に浪費家である。おのれを蕩尽することこそがその偉大さであるからである。……自己保存の本能はいわば取りはずされている。流れでる力の圧倒的に強力な圧力が彼

にそうした保護や用心を禁ずるのである。」(『偶像の黄昏』「或る反時代人間の遊撃」44番S.1020)

ニーチェはこのように「豊かさ」「強さ」という概念を重んずるのであるが、このことは次の文句に最もよく集約されている。

「人が神に信頼するのは、豊かさや強さの感情が人に安らぎをあたえるからである。」(『偶像の黄昏』「四つの大誤謬」6番S.976)

ここでニーチェが「善」「悪」「幸福」さどのように考えていたか、つまりニーチェの重要な価値判断の基準をみておこう。

「善とは何か？——権力の感情を、権力への意志を、権力自身を人間において高めるすべてのもの。

劣悪とは何か？——弱さから由来するすべてのもの。

幸福とは何か？——権力が生長するというもの、抵抗が超克されるということの感情。」(『反キリスト者』2番S.1165)

結局価値判断の基準は「権力への意志」の強弱ということになる。この基準に基いた新しい人間を一言でいうと次のようになる。

「人は人類を、力によって、魂の高さによって凌駕していなければならない。」(『反キリスト者』「序言」S.1163)

さて最後に問題となるのは、ニーチェは以上みてきた如く、キリスト教化された、生のデカダンとしての近代人に対立する新しい人間の育成を問題にするのであるが、そのような新しい人間にふさわしい新しい「生」とはいかなるものなのであろうかということである。ニーチェはこれこそ歴史的にはソクラテス出現以前の古代ギリシアに於て存在した、即ち「ディオニュソスの生」というものであり、この「生」に我々近代人は立ち戻り、この生を我々近代人は取り戻さなければならないと主張する。ニーチェの求める新しい人間とは「ディオニュソスの生」の基盤の上に立つ新しい人間存在なのである。

「いっそう古い、まだ豊かで溢れるほどですらある古代ギリシア的本能の理解のために、ディオニュソスという名称をおびたあの不思議な現象を真剣に取り上げたのは、私が最初である。すなわち、それは、ただ力の過剰からのみ説明される。……したがってゲーテはギリシア人を理解しなかった。なぜなら、ディオニュソスの密儀のうちで、ディオニュソスの状態の心理のうちではじめて、古代ギリシア的本能の根本事実は——その『生への意志』は、おのれをつつまず語るからである。何を古代ギリシア人はこれらの密儀でもっておのれに保証したのであろうか？永遠の生であり、生の永遠回帰である。死と転変を越えた生への勝ちほこれる肯定である。生殖

による。性の密儀による総体的永生としての真の生である。……これら一切をディオニュソスという言葉が意味する。すなわち、私は、ディオニュソス祭のそれというこのギリシアの象徴法以上に高次の象徴法を知らないのである。そのうちでは、生の最も深い本能が、生の未来への、生の永遠性への本能が、宗教的に感じとられている。——生への道そのものが、生殖が、聖なる道として感じとられている。……キリスト教がはじめて、生に反抗するそのルサンチマンを根底にたずさえて、性欲を何か不潔なものにしてしまった。すなわち、キリスト教は、私たちの生の発端に、前提に汚物を投げつけたのである。」(『偶像の黄昏』「私が古人に負うところのもの」4番S.1030 ff.)

「その最も疎遠な最も冷酷な諸問題においてすら生そ

のものへと然りと断言すること、その最高の典型を犠牲として捧げつつおのれ自身の無尽蔵さに狂喜する生への意志——これをこそ私はディオニュソス的と名づけ、これをこそ私は悲劇的詩人の心理学へいたる橋として達成した。……哲学者ディオニュソスの最後の弟子であるこの私は、——」(『偶像の黄昏』「私が古人に負うところのもの」5番S.1032)

〔注〕

本論中の引用文のテキストはシュレヒタ版 (Friedrich Nietzsche. Werke in drei Bänden, 1960) の第二巻を使用した。引用文末の数字はこのテキストのページ数を示す。なお引用文の訳文は「ニーチェ全集、理想社、第十三巻、原佑訳」を全面的に使用した。